**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第７９回　（２０２１年９月１２日）**

**・勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」４１頁　下段　後ろから２行目～**

**～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～**

（参加者による前回の復習より）「ボスマティ・マー」の話の関連で。今日の勉強会の前にもマハーラージは、神を見ている人の中に、神を見ることができるのだということを強調なさっておられた。

**（前回の続き）**

協会にはシュリー・ラーマクリシュナをおまつりした祭壇があります。自分の家に祭壇をまつっている人もいるでしょう。その祭壇のシュリー・ラーマクリシュナの写真は座っています。しかし私たちは果たして、シュリー・ラーマクリシュナの前に（仕事の合間のような短い時間ではなく）座る機会を持っていますか？

シュリー・ラーマクリシュナはいつも祭壇に座り、待っておられます。いつ私の子供は私の前に座るだろうかと待っています。シュリー・ラーマクリシュナはいつも祭壇に座り、いつ私たちを見ることができるだろうかと待っています。しかし私たちは他のものを見ていて、神は見たくない。シュリー・ラーマクリシュナはいつも祭壇に座り、いつ私たちと話できるだろうかと待っています。しかし私たちはあまり話したくない。

神は座っています、見ています、話しています。ですが私たちは座らない、見ない、話さない。神はいかに忍耐強いことか！

もし私たちが座り、見、話せば、神はとても嬉しいです。子どもとそのような機会を持つと、両親はとても嬉しがるものでしょう？　なぜなら子供はいつも好きな遊びに夢中だし、大人になるにつれ、親とは話さなくなるからです。もし、私たちが1歩神に近づくと、10歩神は私たちに近づいてくださいます。しかし今の私たちは、１歩も神に近づいていない。

『ラーマクリシュナの福音』の中にパドマローチャンの話がありますね──「ある村に、パドマローチャンという男が住んでいた。人は略して『ポド』と呼んでいた。この村に一棟の荒廃した聖堂があった。中には神像もなかった。アシュワッタなどの植物が、壁のくずれたところから生えていた。中にはコウモリがすみ、床は塵（ちり）とコウモリのフンとに覆われていた。参詣する村人もいなかった。ある日、暗くなってから村の人びとはこの堂の方角からホラ貝の響きがきこえてくるのを知った。彼らは、たぶん誰かが聖堂に神像を安置し、アラーティをしているのだろうと思った。中の1人がそっと扉を開き、パドマローチャンが一隅に立ってホラ貝を吹いているのを見た。神像が安置されたわけではなかった。堂内は掃きも洗いもしてなかった。いたるところに汚物とごみが積っていた。そこで彼は、ポドに向かってこう叫んだという、『ここ聖堂に神像を安置もしないで、この馬鹿者！　ホラ貝を吹けば混乱が増すだけではないか。昼も夜も絶え間なく、11匹のコウモリが叫んでいるというのに……』」［👉『ラーマクリシュナの福音』５９頁下段］

──この話の中の、掃き清められていない聖堂の状態が、今の私たちの心の状態です。心をきれいにしないと神はあらわれません。しかし心を準備すれば神はあらわれる。そして私たちに話をなさるのです。

**📖４１頁下段 後ろから２行目**

**誰も彼もが、師の話をきいて喜んだ。ふたたびヴィディヤー・シャーゴルに向かって、彼は微笑みつつおっしゃった、「どうぞいつか寺院に来てください──ラスモニの庭園のことだ。美しいところです」**

**ヴィディヤー・シャーゴル「おお、もちろん伺いましょう。あなたがご親切にもここまでおいでくださったのです。ご返礼をしないということがありましょうか」**

**師「私を訪問する？　おお、決してそんなことはお考えなさるな！」**

**ヴィディヤー・シャーゴル「なぜですか。なぜそんなことをおっしゃるのですか。おきかせくださいませんか」**

**師（微笑して）「ね、われわれは小さな漁船のようなものです（みな微笑する）。小さな水路や浅い流れにも入って行けるし、大きい河にも入れる。しかし、あなたは汽船だ。途中で座礁するでしょう」（みな笑う）**

**ヴィディヤー・シャーゴルは黙っていた。シュリー・ラーマクリシュナは笑いながらおっしゃった、「しかし、この季節には汽船でもあそこに行ける」**

**ヴィディヤー・シャーゴル「そうです。いまはモンスーンの季節ですから」（みな笑う）**

**（解説）**

シュリー・ラーマクリシュナは、「美しい庭園がある寺院に来てください」とヴィッディヤー・シャーゴルに言いました。普通なら「私の場所に来てください」と言うところを、エゴがなく、非常に謙虚なシュリー・ラーマクリシュナはそのような言い方をしました。それに対してヴィディヤー・シャーゴルはごく普通に、「あなたに会いに行きます」と答えました。

またもう１つ別の見方で、［編者注：寺院というよりもむしろ］「美しい庭園を見にいらしてください」と強調したのには次のような説明ができます。ヴィディヤー・シャーゴルはとても有名な方でした。それに比べてシュリー・ラーマクリシュナはそれほど知られてはいなかった。それで「ヴィディヤー・シャーゴルを大きな船、われわれを小さな舟」と例えて［大きな船ではドッキネッショル寺院までなかなか来れないことを暗示し］ました。インドで、小舟は魚漁に使います。それは大きな船ではしません。

──ところで普通、話の意味は１つです。しかしシュリー・ラーマクリシュナの話は「普通の意味（簡単な意味）」と「深い意味」との２つあることが特徴です（もし『福音』を何回も何回も勉強して、同じ部分を何回も何回も読むと、私が言っていることは本当だとわかります）。イエスもそうでした。イエスは深い意味を語っていたので時々弟子たちには混乱がありました。聖書には「先生、その意味は何ですか、説明してください」というくだりがあります。するとイエスはさらに説明したのでした。

深い意味を理解できる人は直弟子にも少なかった。直弟子の中でシュリー・ラーマクリシュナの言うことを最も理解したのは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ（もちろんホーリー・マザーもそうですが）です。理由は頭が良いだけでなく、霊的にとても高いレベルで、心がきれいだったからです。シュリー・ラーマクリシュナの話の深い意味は心がきれいでなければ理解できず、まだ心がきれいではない私たちにはなかなか理解できるものではありません。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは言っていました、シュリー・ラーマクリシュナの1つの教えをとって、本１冊分の説明ができると。

『福音』に「ゾウ使い神」の話がありますね──「グルがその弟子に、あらゆるものはナーラーヤナであると教えた。一頭の狂ったゾウが弟子のほうに向かって来たが、彼はグルの言葉を信じているものだから逃げようとしなかった。彼は、ゾウはナーラーヤナであると考えたのだ。ゾウ使いが、『逃げろ！　逃げろ』と叫んだのだが弟子は動かなかった。ゾウは彼を巻き上げて地面にたたきつけた。弟子は死んでしまいはしなかった。顔に水をふりかけられると意識をとり戻した。なぜ逃げなかったのかとたずねられると、彼は『どうして逃げなければならないのですか。グルは「あらゆるものはナーラーヤナである」とおっしゃいました』と答えた。そこでグルが言ったという、『しかしわが子よ、なぜおまえはゾウ使いナーラーヤナの言うことをきかなかったのか』と。［👉『ラーマクリシュナの福音』９２５頁下段］

──その物語をスワーミー・ヴィヴェーカーナンダはある信者に、3日間かけて非常にたくさんの説明をしました。いかにシュリー・ラーマクリシュナの、1つ1つの教えは深いことか！

「大きな船は座礁する」という話に戻りますが、座礁とは「船が水位の低いところを航行して乗りあげること」で、それを踏まえてその深い意味を説明すると──ちょっとイメージしてください、普通の人はどこへだって気にすることなく出かけることができますが、有名人や社会的地位のある人は、どこそこに行って、誰々と面会し、それを他の誰かに見られて噂されることを気にして、出かけるのをためらったりするでしょう？　もちろん当時は現代ほど有名人を追い回すようなことはなかったですけれども。（私は思い出します、ある有名な俳優が朝や夕方を避けて、人目の少ない夜、ベルル・マトに来ていたことを）

ヴィディヤー・シャーゴルは神を信じていないことはないが、それほど興味はなく、それよりも人助けのほうが彼にとっては重要でした。その彼を、世間は「寺院に行かず、神に興味がない慈善家」だと思っていました。その人が突然、ドッキネッショル寺院に行ってシュリー・ラーマクリシュナと面会したら、世間の人々は何と言うだろうか、それを気にしてヴィッディヤー・シャーゴルはその後シュリー・ラーマクリシュナの元に行くことはなかったのです。

**📖４２頁上段 後ろから５行目**

**Mは思った、「これはほんとうに、新しく生まれた愛のモンスーンだ。こんなときには、人は、威信［＊英語版ではprestige（地位や品質の高さなどからくる）威信、名声、信望、威光）］とか格式［＊formalities（形式にこだわること、形式尊重、堅苦しさ、（内容のない）形だけの行為）］とかにはこだわらない」と。**

**（解説）**

Mさんはこのとき、そのような愛の関係を、シュリー・ラーマクリシュナとヴィディヤー・シャーゴルのあいだに見ました。が、Mさんのそのコメントは正しくありませんでした。一方、シュリー・ラーマクリシュナの「座礁する」というコメントは本当になりました。ヴィッディヤー・シャーゴルは「伺います」と言ったのに、二度とシュリー・ラーマクリシュナの元に来ることはなかったからです。

その後、シュリー・ラーマクリシュナはよく、学者とサドゥ（神聖な方）の違いを説明なさいました。ヴィディヤー・シャーゴルは良い性質をたくさん持っていた学者でしたが、しかし道徳的な見方では、約束をまもらないのは絶対によくありません。それと比べ、サドゥにはエゴやうぬぼれがなく、名声欲も、他人から批判される心配もありません。ですからえ約束したら絶対に守りますし、自由自在にどこへでも出かけます。このように、シュリー・ラーマクリシュナは学者とサドゥは大きく違うと言っていて、それはヴィディヤー・シャーゴルにも同じようにおっしゃっていました。

**📖４２頁上段 後ろから２行目**

**シュリー・ラーマクリシュナはそこでヴィディヤー・シャーゴルに別れを告げられ、ヴィディヤー・シャーゴルは火のついたロウソクを手に、友人たちをしたがえて正門まで師を見送った。部屋を出る前に、師はこの家族の幸福を祈りつつ忘我の状態にお入りになった。**

**（解説）**

僧が信者の家を訪問すると、必ず神の御名を唱えて、家族の幸福を祈ります。シュリー・ラーマクリシュナもそのようにしました。

**📖４２頁下段L４**

**師と信者たちが正門に着いたとき、彼らは思いがけない光景を見て立ちどまった。目の前に、三六歳ぐらいの色の白い、あごひげを生やした紳士がいたのである。彼はベンガル人のような服装をしているが、頭にはシーク教徒風に結んだ白いターバンをつけていた。彼は師を見るやいなや、その前にひれ伏した。**

**彼が立ちあがると、師はおっしゃった、「これは誰か。バララームか。なぜこんな夜おそくに？」**

**バララーム「私は長いことここでお待ちしておりました」**

**師「なぜ入ってこなかったのだ」**

**バララーム「みなさんがお話にきき入っているので、あなたのおじゃまをしたくないと思いました」**

**師はお供の人びととともに馬車にお乗りになった。**

**ヴィディヤー・シャーゴル（Mに、そっと）「馬車賃をお払いしようか」**

**M「いえ、どうぞご心配なく。支払う者がおります」**

**ヴィディヤー・シャーゴルと彼の友人たちはシュリー・ラーマクリシュナにお辞儀をし、馬車はドッキネッショルに向かって出発した。しかし、ロウソクのあかりを手にした尊敬すべきヴィディヤー・シャーゴルをはじめとする小さな一団は、師の姿が見えなくなるまで門前に立って見送った。**

**（解説）**

ベンガル語の原著には、このあと、次のような続きがあります。（英語版にはありません。従ってその翻訳版である協会出版本にもないのです）

**「信者たちはこう考えているように見えた──この偉大な方はいったいどなたなのだろう？　神をこれほど深く愛している御方とは。それだけでなく、みずから普通の人の家に行って、人生の目的は神への愛だという助言をなさる、この御方とは。」**

その偉大な方、シュリー・ラーマクリシュナには2つの特徴がある──①自身が神への深い愛に満ちている、②普通の人の家を訪ねては神への愛を説いている──これはMさんのコメントです。

普通の悟った人であれば、悟った人の元に信者が行って、悟った人は自分の元に来た人たちに教えを述べます。しかしシュリー・ラーマクリシュナは、ドッキネッショル寺院に来る人々にも、またヴィッディヤー・シャーゴルのように、普通の人の家に出かけてその家に関係する人々にも、神の教えを述べられました。この特徴はイエスやブッダにもあります。ブッダは40歳位で悟りを開き、その後80歳位まで、さまざまな場所に歩いて出かけては説法しました。イエスやブッダは歩きで、シュリー・ラーマクリシュナの時代は馬車で、現代は現代の馬車である新幹線や車で、北海道から沖縄までいろんなところに行って、神への愛について話しています。

ところでシュリー・ラーマクリシュナは約12年に及ぶ霊的実践で、身体がバターのようにソフトに柔らかく変化しました。マッサージをする信者に「そんなに強くしないで、骨が壊れるから」と頼むこともありました。シュリー・ラーマクリシュナは時々泣きながらこう言いました、「前の神の化身であるシュリー・チャイタンニャはあちこち歩いて神の愛について話していた。だが私は身体が弱いから、馬車がなくては出かけていって神の愛について話すことができない。私はそれが悲しい」

**人生の本当の目的**

この章の最後に言いたい重要なことは、「神への愛、神の悟りこそが人生の目的」だということです。

しかし「あなたの人生の目的は？」と聞かれて、普通は、お金を稼いで豊かな生活を送る、楽しみや喜びのものをたくさん買う、人生をハッピーに生きる、名誉や名声、自分と家族の喜び、オリンピックのメダルetc.──と答えるでしょう。人を助けることが人生の目的の人もいますが、そのような人は少ないです。そして少ないよりも少ないのが、神を愛すことが人生の目的だとはっきり言える人です。ですがそれが最も良い人生の目的ではないですか？　皆さん、神への愛と、他の人生の目的と、どちらが偉大か考えて下さい。

もちろん信者は神への愛のほうが偉大だとわかるでしょう。しかし一般的な普通の人にはそれを質問することさえできないです。「あなたは頭がおかしい」と一蹴されるか怒られます。もしも世論調査で人生の目的についての質問項目があったとしても、答えの選択肢の中に「神への愛」などありはしないでしょう。しかし識別をすれば、その答えはとても源的（みなもとてき）、基礎的なものだとわかるのです。

ある木の花が好きになりました。それはバラの花で、その花は素晴らしく美しく、かぐわしい。ですがその美しさ、新鮮さはどれぐらい続きますか？　二日間か三日間ぐらい？　その後その花はしおれてしまいます。言いたいのは、「花を好きにならず、［その源である］花の木を好きになってください」ということ、つまり「創造を好きにならず、［その源である］創造者を好きになってください」ということです──このことをシュリー・ラーマクリシュナはいつも助言していました。

私たち普通の人は、創造（されたもの）が好きです。楽しみの対象、つまり目や耳などの感覚の対象はすべて創造されたものではないですか？　そして創造と創造者、どちらが永遠ですか？　創造されたものには常に始まりがあり、衰えがあり、そしてなくなります。しかし創造者はそうではありません。始まりがあるものを創って、衰えてなくなったら、また新しいものを創造します。

しかしもし、創造されたものにたった１つでも執着すると、とても良い状態のときには嬉しいし楽しいけれども、徐々に衰え始めると、そのとき心が痛くなりませんか？　やがてそれが無くなったら、もっと痛くなるでしょう。それが問題です。ですから考え方を変えなければなりません。

ではどのようにして変えますか？　識別しなければ変わりません。またそのためには内省も必要です。識別と内省、その２つを実践しない限り、考え方・見方が変わることはありません。なぜ皆さんは変わらないのでしょうか？　なぜならそうしていないですから。内省も無い。識別もしない。その種類の人は、変化は──

変化は無理ではない。とても大きなショックを受けると、そのショックで今までの自分の考え方・やり方に疑問を持ち、変わり始める可能性はあります。

私の観察では、30歳35歳位まで、人生の目的についてあまり考えません。30歳35歳位から、少しずつ、今までの生活はどうだったか、今までの人生はどうだったか、人生経験から何を学び、何を理解したかについて考え始めます。

若い人にはいっぱい夢があり、人生が明るい。ですが人生は明るいだけのものではないでしょう？　それが若いときにはあまりわかりませんが、大人になるにつれて理解していきます。やがてもっともっとそれを理解して、人生の木には甘い果物も苦い果物もあるとわかります。また、甘い果物だけだったら、誰も信者になりません。（笑い）

人生の木の果物は時々とっても甘い。時々とっても苦い。時々苦い味がずっと続き、またちょっと甘いものを食べる事ができても、またもっと苦いものを食べます──私たちの人生はそのようなことが最後まで変わらず続きます。そしてそれを変えないのが普通の人で、賢い人は「そのような人生はもう十分」、と思います。

賢い人は、35歳位までにそれを理解して、人生は甘い部分と苦い部分が、フィフティフィフティなどではなく、15％楽しみだったら85％ぐらいは大変なことばかりだと考えて、これからは別のやり方を探そう、別の道を探さなければならない、と思います。そこが窓口となり神について考え始めます。

創造と創造者の大きな違いは何ですか？　創造は一時的、創造者は永遠です。一時的なものに執着すると、一時的なものには絶対に始まりがあり、衰えがあり、なくなるものなので、その影響で心が痛くなります。そのことを考えて、シュリー・ラーマクリシュナは「創造を好きにならず、創造者を好きになってください。宇宙を好きにならず、宇宙を創る神様を好きになってください。それが人生の目的です」とおっしゃいました。

その結果、神を悟ると、神はサット・チット・アーナンダ、すなわち一番の楽しみ、一番の知識、一番の自由ですから、悟った人はそれを得ます──そこまで理解が進んだら、「人生の本当の目的は神への愛だ」とわかります。またその理解がない限り、人生に大変な事が起こる度に「苦しいときの神頼み」をして、神のおかげで大変な時期が過ぎると、何も変えずにまた今までの状態に戻ります。

そのような人は、問題の解決が欲しいのではない。ちょっとラクな状態が欲しいだけです。

皆さんの目的は、大変な状態が少しラクになればいい、それだけです。

そしてラクになったらまた前と同じように続けます。

原因まで考えて、問題の解決を図ろうとする人はとても少ない。問題の本当の原因は、一時的なものに執着になることなのに。

**（Q＆A）**

**Q：**ヴィディヤー・シャーゴルさんが、最終的にシュリー・ラーマクリシュナに会いに行かなかった理由ですが、今のお話の中ではエゴとかそういうことでしたが、一番は神様への愛が少なかったとか、興味がなかったということになるのでしょうか？

**A：**そうです。それが一番。ヴィッディヤー・シャーゴルは自分が正しいと思うことは他人の意見に関係なく実行する人でもありました。そのことを考えると、たぶん、一番は、神様に興味がなかったから。神に興味がないと、シュリー・ラーマクリシュナの所にいってもあまり意味がないですからね。

**Q：**それは結果的に、ヴィディヤー・シャーゴルは生まれ変わって、結局は神様を愛するような生き方に最終的にはなっていくと。

**A：**ですが、これは私の考えですが、ヴィッディヤー・シャーゴルは神に興味がなくても、他の見方でとても素晴らしい方でした。ですから神の恩寵で、シュリー・ラーマクリシュナが自分でヴィッディヤー・シャーゴルの元に行きました。「シュリー・ラーマクリシュナが来た」と「神が来た」は一緒でしょう？──そのように説明することもできます。

「ヴィディヤー・シャーゴルは偉大な方だったから、神はヴィッディヤー・シャーゴルの元に来た」、そう考えてください。「自分で行かなくても神が来ました」というのは、自分で行くよりももっと素晴らしいではないですか？　それに、ヴィッディヤー・シャーゴルは信者ではないのにシュリー・ラーマクリシュナはその方の元へ行った。それが恩寵。これがシュリー・ラーマクリシュナの恩寵です。

**（賛歌奉献）**（映像データの１：５１：２０頃）「ラーマクリシュナ　シャラナン」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上